

覚え書・英国中世の小聖堂にみる 《福音書記者聖ヨハネ伝の窓》

高 野 禎 子

Etude sur quelques panneaux isolés de fenêtres figurant
« la Vie de saint Jean l'Evangéliste » en Angleterre.

Yoshiko TAKANO

Grâce aux recherches récentes de Painton Cowen, nous venons de trouver quelques panneaux de fenêtres figurant «la Vie de saint Jean l'Evangéliste» dans les villages anglais de Madley et de Twycross.

A Twycross se trouvent deux morceaux de vitrail de saint Jean l'Evangéliste provenant de la Sainte-Chapelle de Paris ; et dans Madley Church, qui se situe à environ dix kilomètres au sud-ouest de Hereford, et dont la «Baie Est» est composée d'un mélange d'éléments ayant appartenu à des vitraux de différentes époques, parmi lesquelles le XIIIème siècle, nous avons identifié les trois sujets suivants :

- 1) Devant Aristodème, saint Jean boit la coupe empoisonnée.
- 2) La Cène ; saint Jean s'y incline contre la poitrine du Christ.
- 3) La Dormition glorieuse de saint Jean.

On ne connaît pas l'origine de ces scènes, mais à notre avis, aussi différentes soient-elles sur le plan stylistique des vitraux de la cathédrale de Lincoln, les figurations de l'église de Madley sont néanmoins à mettre en relation avec ces dernières.

要 旨

本稿は2015年の夏にロンドンを起点に行った、英国中世のステンドグラス《福音書記者聖ヨハネ伝の窓》に関する調査報告である。近年ペイントン・コーエン他の研究により知られるようになった下記の2作例に注目した。13～14世紀にかけての英国では、従来考えられてきた以上に同主題の窓が制作されていたと、筆者は考えている。(Ⅰ) トウィクロス教会；パリ、サント・シャペル旧在の同主題の窓の断片を所有。(Ⅱ) マッドリ教会；聖ヨハネ伝中の3場面：「毒杯の奇跡」、「栄光の死」、「最後の晩餐」を所有する。これら断片は様式的に、既に知られる英仏両国のどの作例とも類似しない。また来歴も不明である。ただし近隣ヘレフォード大聖堂、さらにリンカン大聖堂との深い繋がりも見出せるので、今後の継続調査が必要である。

序

イヴ・クリストは「サント・シャペルの福音書研究への序章」と題された論考において、同聖堂内の《Baie I：キリスト幼児伝窓》に関して次のように述べている。内容を要約すると以下の通りである¹。

サント・シャペル上堂の軸線上に位置する《受難伝の窓》の北側に隣接して置かれている「キリスト幼児伝」と「福音書記者ヨハネ伝」が一組になった高窓の、最頂部を占めるのは「聖母戴冠」であり、双方の窓はともに半フュゾ（鍾・つむ）の形をした計15個の区画を有している。同窓は二列構成になっており、計30パネルで成り立っている。そのうち21パネルが、全体もしくは一部オリジナルだが、これに西洋各地に散在して残る5パネルを付け加えなくてはならない。この5パネルとは、次のとおりである。

- ①ルーアン美術館の2パネル；「神殿奉献」、「馬に乗る二人のマギ」
- ②トウィクロス教会のパネル；「王の前のヨハネと従者」
- ③移設されて所在のはっきりしない2パネル；「馬に乗るマギ」、「羊飼いと羊の群れ」²

これに対しクリストは、左ランセットの《福音書記者聖ヨハネ伝の窓》については、15パネルのうちの7パネルが現代の作で、欠落部位は深刻であると述べている。このサイクルを「修復」するには不十分な8パネル

しか残されていないからである。7 パネルは元の位置にあり、残る 1 パネルが、本稿で紹介する英国の地方の村であるトウィクロス Twycross に現存する。

一方フランソワ・ド・ギレルミイ F.de Guilhermy が 1850 年にサント・シャベルに残したパネルは次の通りである。パネル番号で言えば、〔I - 15〕, 〔I - 5〕, 〔I - 78〕, 〔I - 76〕, 〔I - 40〕, 〔I - 30〕, 〔I - 28〕, 〔I - 18〕, 〔I - 16〕, 〔I - 6〕であり、うち 2 パネルが「福音書記者聖ヨハネ伝」である。さらに 8 パネルが「キリスト幼児伝」であり、その時点で既に場面配置に混乱が見られたという。キリストが提示する仮説の一つは、例えば窓の下三分の一に「聖ヨハネ伝」、上の三分の二に、「キリスト幼児伝」があった可能性もあるという³。このキリストの指摘は大変興味深い。彼がこの仮説の根拠の一つとして提示するのは、トゥール大聖堂の窓《Baie1》であり、それが同町のサン・ジュリアンからの移設で《キリスト幼児伝の窓》であると紹介している。

本稿では《福音書記者聖ヨハネ伝の窓》について、英国で筆者が行った調査の結果を報告する⁴。その際イヴ・クリストの指摘は大変参考になると思われる。パリのサント・シャベルのみならず、トゥール大聖堂の《福音書記者聖ヨハネ伝の窓》もまた、本来どのような構成だったのか、21 世紀の今日もなお正確に把握されてはおらず、聖ヨハネ伝がキリスト幼児伝との組み合わせで一对となっていた事実には、どのような意味が込められていたのだろうか⁵。拙稿『聖ヨハネ伝の窓』について私家版カタログにまとめてから 10 年以上経過したが⁶、その後の調査により、同主題の窓が英仏の地方の聖堂になお残されていることが判明した。今後もさらなる調査の継続が必要であろうと思う所以である。

本稿でまず確認しておきたいのは、英仏両国にまたがる形で「聖ヨハネ伝」の窓が従来考えられていた以上に多く存在していた可能性が高いことである。特に顕著な時代は 13 世紀である。この時代、ステンドグラスに見られる同主題に関していえば、聖ヨハネは決して福音書記者として描かれてはおらず、新約聖書の末尾を飾る「ヨハネ黙示録」の著者像としてのみ登場している。

黙示録の著者であること、これが 13 世紀の聖堂の窓の主題として本質的に重要な点であった。その事実に注目しておく必要がある。周知のとおり

り、福音書記者聖ヨハネは初期キリスト教時代から、黙示録の著者でもあったと考えられていた。その意味からすれば、福音書記者ヨハネ像と考えて間違いはないものの、明らかに「黙示録」を執筆する姿で登場する聖ヨハネに関しては、むしろ「黙示録の著者」である事こそが、ステンドグラスにその生涯を描かせた主要な目的であったことは確かである。さらに英国中世において、福音書記者ヨハネが特に重視されていた可能性についても、検証する必要がある⁷。窓の主題に聖ヨハネの生涯を描いたことは、特に英国においてどのような意味を持っていたのか。フランス国内に残された同主題の窓の多さから、ともするとフランス中世を問題にしがちだが、英国の重要性を見失ってはならない。フランスでは英国とは異なる形で発展を遂げた可能性もある。そうした意味において、同主題の誕生とともに変遷の過程をも考慮すべきであろう。いずれにせよ、作例を丁寧に調査しながら実態を明かにしてゆかねばならない。2018年2月までに加わった新たな作例を、以下に報告しておきたい。

I. トウィクロスの聖ジェームズ教会 *Twycross, Saint James' Church*

トウィクロスの聖ジェームズ教会には、パリのサント・シャベルから移設されたステンドグラスをはじめとして、フランスの国内から様々な理由で持ち込まれた窓の断片がある⁸。それらは中世時代に遡る断片であり、聖ヨハネ伝の窓の一場面もここにある。詳細は後にまわすが、場面の主題は「皇帝ドミティアヌスの前の聖ヨハネ」と判断されている。この場面はしかし、二つのパネルに分かれて配置され、解釈等で留意すべき点もないわけではない。

教会の歴史

トウィクロスは北ミッドランド地方、レスターシャー州の村で、レスターの町の西方に位置している。教会の歴史は古く、おそらくブランタジネット朝の初代の王ヘンリー2世（在位1154-89）の時代に創設されたと考えられている【図1】⁹。ただ今日の聖堂は元の状態を留めておらず、最も古い壁体でも14世紀半ば頃とされている。主要な壁体は1330-50頃、やや古い壁は身廊の南側にあり、東窓のトレーサリは14世紀半ば頃と推定される。身廊の窓も恐らくはこの時期のものである。これに対して内陣部の



図1 トウィクロス教会（14世紀半ば頃）

尖頭アーチ型窓は、古式を留めるステンドグラスによって注目に値する。窓は三葉形の頭部をもっており、トレサリには砂岩が用いられている。

内陣部東窓のステンドグラス

この窓に現状のような形でステンドグラスが再調整され嵌め込まれたのは、1840年のことである。

Thomas Willement トマス・ウィルメントというステンドグラス職人により、古いガラスの再利用と新たなガラスを組み合わせで現在の窓になった¹⁰。紫色の縁取りはこの時の職人の手になるとされ、石造トレサリは14世紀の英国製である。これに対して主要部分のガラスはいずれもフランスからもたらされたステンドグラスであり¹¹、それらの制作年代は1140～1350年頃とやや幅がある。中にはフランスで最も古いサン・ドニ修道院聖堂からの断片もあって貴重である。

ステンドグラスの来歴

フランス革命時の1789-99頃にかけてハノーヴァ朝の王ジョージ3世¹²

(1760-1820) の所有となり、息子のジョージ 4 世 (1820-30) に引き継がれた。その後王は、兄ウィリアム 4 世にこれを託した。この王はしばしば HOWE ハウ伯のゲストとしてこの土地に滞在した経験もあり、以下のステンドグラスの断片は、おそくとも 1830 年代にはこの教会に置かれていたと考えられている¹³。先述の通り、1840 年には上記トマス・ウィルメントと Wathen Waller ワーデン・ウォーラーによりこの聖堂に寄贈されたという。

- ①パリのサント・シャペル由来の断片 (SP と略記; 1145 頃)
- ②サン・ドニ修道院聖堂由来の断片 (SD と略記; 1140 頃)
- ③ル・マン大聖堂の断片 (LM と略記; 1100-35 頃)
- ④サン・ジュリアン・デュ・ソー聖堂の窓 (JS と略記; 12 世紀後半)

なお 1939-45 年の第二次世界大戦の時期には、これらは全て疎開を余儀なくされた。戦後しばらくは復興せぬままであったが、1983 年 10 月になってようやくヨークのガラス工房に運ばれて、修復がなされ、再び窓に設置されたのは、1984 年 11 月のことであった。以下に窓の実際を見てみよう。

ディスクリプション

窓は大きく 6 つの区画に分かれており、最頂部の三つ葉形の区画には 15 世紀の英国ガラスが嵌め込まれている【図 2】。三つの高窓のうち中央部がもっとも幅広く、両脇のやや細身の高窓とともに小区画の総数は 12 である。中央窓については、上から二番目の区画のみ「半円アーチ型」であり、描かれる主題は、下から上へ、順に《カナンの葡萄》【図 3】、《十字架降下》【図 4】、《神殿奉献》【図 5】である。(サン・ドニ由来 1200 年頃?) が描かれている。他方向かって左側の窓と右側の窓の双方には、同定に多少異論があるものも含めて、確認できた主題は以下の通りである。

《十戒の板をもつモーゼ》、《ダビデ王》、《モーゼの前の人々》などである。さらに《聖ベネディクト伝》の一部 (1200 年頃) や、《跪く女性》(14 世紀)、そして本稿で求める主題《玉座に座すドミティアヌス帝》【図 6】の場面が十分な精度で確認できた。その左に位置するガラスに描かれているのは、聖ヨハネである【図 7】。聖ヨハネは、赤い光輪のついた小さな頭部と長身の体躯で描かれている。なお《十字架降下》【図 4】の場面には、聖母マリアと聖ヨハネの他に 2 人の人物がいる。

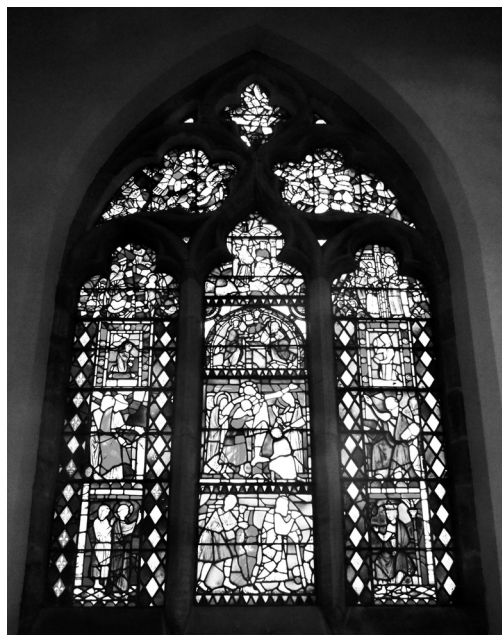


図2 トウィクロス教会の東窓（ステンドグラスは13～15世紀）



図3 カナンの葡萄（図2部分、以下同様）



图4 十字架降下



图5 神殿奉献

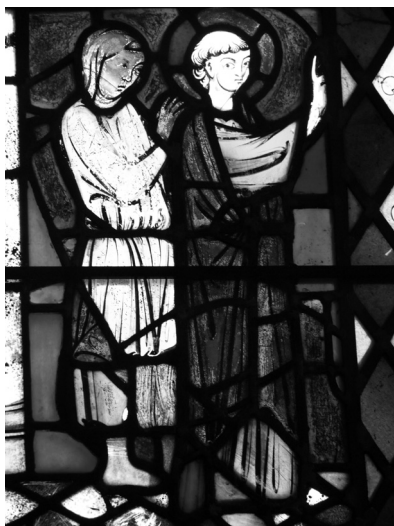


図7 聖ヨハネと従者



図6 玉座に座すドミティアヌス帝

Ⅱ. マッドリ教会 Madley Church ; Nativity of the Blessed Virgin Mary

マッドリの村は、ヘレフォード Hereford の西方6マイル(約9.6km)に位置し、古代のローマ街道が通る歴史のある地域に属している。村の教会には、聖ヨハネ伝の窓が断片の形で三場面残されている。ただしこれらの断片は、もともとこの聖堂にあったとは考えにくく、他の場所からの移設とされている。

教会の歴史

マッドリ教会の起源は12世紀に遡ると考えられているが、現在の聖堂は13～14世紀にかけて建てられたものである。マッドリ教会は6つのベイより成る身廊部と側廊部から構成されている【図8】。祭室部は八角形の半分の形で外部へと張り出し、身廊北側にある入口はかつての翼廊であった可能性も指摘されている。1320年頃に大規模な改築がなされ、今日の聖堂はこの時の改築に負うところが大きい【図9】。祭室部分が今の形になったこと、地下にクリプトが造られたのもこの時である。その後、

17世紀、18世紀と修復がなされ、19世紀の始めには二度の大規模な修復がなされた。20世紀後半にも何度か修復が行われて今日に至っている。

南側には小礼拝堂があり、西側の塔とともに特徴ある外観を見せている【図10】。1320年に改築された聖堂には、後述のとおりステンドグラスがあるが、この時期より明かにそれ以前に遡る、様式の異なるガラス断片があつて、それらの来歴や出自ははっきりしない。

ステンドグラスについて

マッドリ教会の東窓には年代の異なるステンドグラスの断片が寄せ集められている【図11】。最も初期の作例は13世紀に遡り、14世紀ないしその他の時代の断片も混在している¹⁴。ここにある他の諸場面はもとより、筆者が問題にしている「聖ヨハネ伝の窓」に関する研究はごく一部を除いてなされていない。13世紀の断片として、キリスト幼児伝から《マギの礼拝》、聖ヨハネ伝から《アリストデモスの前の聖ヨハネ》など興味深い作例が見られる。他に14世紀の《エッサイの樹》や《司教像》、《預言者像》のヨシュア、エゼキエル像などもある。聖ヨハネ伝場面に限って見ておくと、以下の三場面が重要である。

①アリストデモスの前、毒杯をあおぐ聖ヨハネ

②最後の晩餐の情景

③聖ヨハネの栄光の死

各場面を丁寧にみると、《マギの礼拝》を加えた計4場面は様式的に見て同じ出自とわかるが、これらが果たしてどこの教会に由来するのか、現在もはっきりしていない。唯一手がかりとなるのは、マッドリ教会がヘレフォード参事会員 Hereford Canons の所有であり、英国全体を眺めても Nativity of the Virgin、つまり「降誕の聖母」に献じられた教会は極めて稀であり、F. ボンドによれば英国内では12を数えるのみとされる点などの特徴が認められるとのことである¹⁵。

ディスクリプション

東側の窓は三つのランセット窓と、その上部に四葉形の変形型三つを重ねた形の尖頭型の窓から構成されている。これは出自が定かではないものの、年代的に相当近いと思われる作例がランセット窓の上部に二段になっ



図8 マッドリ教会（13～14世紀の創建）



図9 マッドリ教会内部



図10 マッドリ教会南側面と祭壇

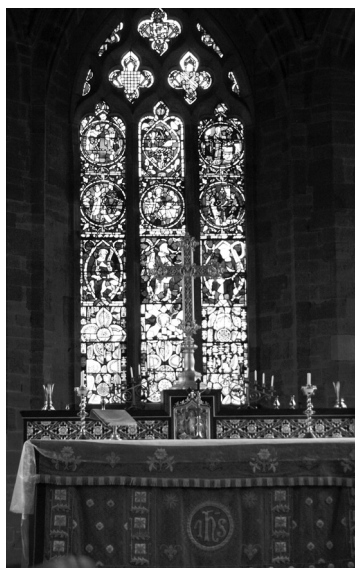


図11 マッドリ教会の東窓（ステンドグラスは13~14世紀）

て配置され、下方約5分の3には明らかに様式の異なるステンドグラスが置かれている。まず上方の計6場面を見てゆきたい。

向かって左には、聖ヨハネ伝からの二場面を含む四場面が見られる【図12】。下が《アリストデモスの前で毒杯をあおぐ聖ヨハネ》【図13】であり、上には《聖ヨハネの栄光の死》【図14】の場面がある。

中央の窓には、下に《最後の晩餐》【図15】、その上には《聖女たちの聖墳墓参り》【図16】がある。この場面のみがフュヅ型の下に尖ったアーモンド形をしており、他の場面が円形であるのとは形状が異なっている。また右の窓では、《マギの礼拝》【図17】と《神殿奉献》【図18】の場面が上下に配されており、キリスト幼児伝、受難伝とともに聖ヨハネ伝が混じって置かれている状況である。以下に聖ヨハネ伝を中心に、各場面を詳しく見ておきたい。

聖ヨハネの登場する3場面

①アリストデモスの前で毒杯をあおぐ聖ヨハネ【図13】

円形の枠内に7名ほどの人物が居る。背景の青ガラスのメダイヨン内には、向かって右に王冠をかむったアリストデモスが玉座に座り、左手に剣をもっている。光輪をつけた白い衣のヨハネは王の前に立ち、両手で杯を受け取りそれを飲もうとしている。王の着衣は緑の長衣にマントをはおっており、ヨハネの方は白一色の衣を身につけている¹⁶。王の足元を見ると、2人の男が既に息絶えている。毒杯で落命した者達であろう。またヨハネの周囲には三つの顔が見えるが、これは役人達であろうか。ヨハネの両足は裸足で、全体はダイナミックな群像表現になっており、このガラス工の場面構成の特徴が伺える。

②聖ヨハネの栄光の死【図14】

聖ヨハネは両手を合わせて棺の中に横たわり、祈りの姿勢をとっている。計4人の人物がヨハネの死を見守っている。このメダイヨン全体の傷みは激しいものの、ヨハネを取り巻いて心配そうに見守る人々の動揺が、色彩の対照とともにはっきり見てとれる。ヨハネの光輪は赤色で衣は黄、棺の水平線は緑色の帯となって円形の枠組みを支えている。背景の青地が人物達の垂直線と呼応して、全体のダイナミックな調子を整えている。

③最後の晩餐【図 15】

白い水平に伸びたテーブルの前に、十字架光輪のキリストが正面向きに座り、その胸にもたれかかる緑衣の聖ヨハネが小さく描かれている。二人の弟子達がキリストの両脇に居て、テーブルの手前にいるのは裏切り者のユダである。彼は極端に小さく描かれており、両手をテーブルの前でだらりと下げた格好をしている。限定された人数ではあるが、明快に情景が見てとれるのは、色彩の工夫と限られた人数のみで場面を構成するというガラス工の努力の賜物であろう。なおこれらは下方の「エッサイの樹」に登場する人物達と様式的に異なっている。制作年代や出自が明かに異なることがわかる。

問題点

13 世紀にはヘレフォードとリンカン司教区とはとても近しい関係にあったという¹⁷。ヘレフォードの司教はリンカンから来ていたという。リンカン大聖堂ではその存在が既に確認されている「聖ヨハネ伝」の窓の三場面との繋がりが示唆される。

結びに代えて

以上、英国で二か所の小聖堂にある《福音書記者聖ヨハネ伝の窓》の断片を確認したが、その他やや年代が降るが、ウェールズ Wells 大聖堂にも一連の「黙示録著者としての」《聖ヨハネ伝の窓》が明確な形で現存する【図 19】。特にこの大聖堂では西正面全体に「ヨハネ黙示録」のテーマも彫刻で表されており、内部のステンドグラスとの関わりに関しても注目すべき特徴が認められる。いずれ稿を新たに論じたい。

またパリのサン・ジェルマン修道院聖堂でも昨年夏に行った調査の結果、内陣部右方に位置する窓の一部に、「聖ヨハネ伝」と思われる断片を見出した【図 20】【図 21】。この窓の主題は従来から謎とされており、文献等の後付けは充分ではないが、興味深い作例として今後の課題とする¹⁸。



図 12 聖ヨハネ伝のある部分（図 11 部分）



図 13 アリストデモスの前で毒杯をあおぐ聖ヨハネ（図 12 部分、以下同様）



図 14 聖ヨハネの栄光の死



図 15 最後の晩餐



図 16 聖女達の聖墳墓参り



図 17 マギの礼拝



図18 神殿奉献



図19 ウェールズ大聖堂の聖ヨハネ伝の窓（14世紀）



図 20 パリ、サン・ジェルマン聖堂の窓



図 21 聖ヨハネ伝？（図 20 部分）

注

- 1 Yves Christe, «Prolégomènes à l'étude de l'*Evangelium* de la Sainte-Chapelle », *IKONOTHEKA*, 19, 2006, pp.141-150.
- 2 “Deux autres , rejetés par F.de Guilhermy et consignés dans le t.18 des relevés de L.C.A.Steinheil, fol.8 et 9 (une mage à cheval et un berger isolé, assis au milieu de ses bêtes). ” Yves Christe, op.cit., p.141.
- 3 Ibid, p.142.
- 4 2015 年の 8 月、大学の文化史学特別演習のロンドン研修旅行の際に学生を引率して現地を訪れた。その折に撮影した現地の様子とともに、パリから隔たったイギリスの寒村にひっそりと守られているフランス中世の代表的なステンドグラスの断片に巡り合えたことは大変有意義なことであった。
- 5 「キリスト幼児伝」と「福音書記者聖ヨハネ伝」の窓が並置される作例は他にも確認できるが、そうした組み合わせとは別に「キリスト受難伝」との組み合わせなども見られる。他の主題の窓との組み合わせも含めて課題としたい。
- 6 高野『カタログ《聖ヨハネ伝の窓》』（平成 25 年度鹿島美術財団研究助成金による報告書）、2013 年。同仏語版『*Répertoire des Vitraux du Moyen Age figurant la Vie de saint-Jean l'Évangéliste en France et en Angleterre*』, Accrea (Tokyo), 2014.
- 7 聖ヨハネの重要性に関して、次の論考参照のこと。
・Mayer Schapiro, “Two romanesque drawings in Auxerre and some iconographic problems” in *Romanesque Art*, 1977, pp.306-327.
- 8 サント・シャベルの散逸した窓について、以下の Corpus Vitrearum を参照のこと。
・M.Aubert, L.Grodecki, J.Lafond, J.Verrier, *Les Vitraux de Notre-Dame de Paris et de la Sainte-Chapelle* (CVMA, France, t.I), Paris 1959. Especially Twycross Church; pp.56-57, 66-67.
- 9 ヘンリー 2 世 (1133-89) プランタジネット朝初代の王。仏アンジュー伯ジョフロワとマティルダとの長子で 1154 年に即位し、記章として採用したハリエニシダ（プランタ・ゲニスタ）に因む名称としてプランタジネット朝と呼ばれる。王権を強化してイギリス全土とフランスの西半分を領有。教会の裁判権をめぐる対立からカンタベリー大司教トマス・ベケットを暗殺に至らしめた。
- 10 紫色の縁取りはこの時の職人の手になる。Cf. Albert Herbert, “Old Glass in Twycross Church” in <https://www.le.ac.uk/scraptofsPages>
・H.T.Kirby, “Ancient Glass at Twycross”, *The Burlington Magazine for*

Connoisseurs, Vol.82, No.482, 1943, pp.124-127.

なお英国のステンドグラスの基本的な文献として次の書物を参照した。

- ・ Painton Cowen, *A Guide to Stained Glass in Britain*, Michael Joseph Ltd. 1985, London; Twycross church については特に p.133 参照のこと。
- ・ Id., *The English Stained Glass*, Thames and Hudson, London, 2008.
- ・ Richard Marks, *Stained Glass in England during the middle Ages*, London, 1993.
- 11 これは Wilton (Wilts) の聖堂や Rivenhall (Essex) の聖堂と同様、フランス起源のガラスが嵌め込まれている。
- 12 ジョージ 3 世 (1738-1820, 在位 1760-1820) イギリスのハノーバー朝第三代の王で王権回復を試みホイッグ党の勢力抑止に努めたが、50 代後半に精神を病み執務が出来ない状態に陥った。その後皇太子が政務をとり、父王の死後ジョージ 4 世 (在位 1820-30) として即位した。
- 13 ステンドグラスの来歴等に関しては、注 10 の A.Herbert の論考他を参照した。
- 14 Madley 教会に関しては、以下の資料によった。
 - ・ Painton Cowen, *op. cit.*, (2008) p.56-57.
 - ・ Id., *op. cit.* (1985) 特に Madley Church については p.118 参照のこと。
 - ・ <http://www.britishlistedbuildings.co.uk/en-155095-church-of-the-nativity-of-the-bless...>
- 15 Cf.F.Bond, *Dedications of English Churches, Ecclesiastical Symbolism, Saints and Emblems*, Oxford University Press, 1914.
 - ・ A.Brooks and N.Pevsner, *The Buildings of England : Herefordshire*, New Haven and London, 2012.
- 16 ガラスの修復によるものと思われる。汚れがないため相当新しい印象を与える。
- 17 ヘレフォード Hereford 大聖堂とリンカン大聖堂 Lincoln との関係に関しては以下の書籍を参照のこと。
 - ・ F.C.Morgan, *Hereford Cathedral Church Glass*, Leominster Orphan, 1967.
 - ・ Peter Barber, «Medieval maps of the world», in P.D.A.Harvey(ed.) *The Hereford World Map, medieval world maps and their context*, London, British Library, 2006, pp.11-44, esp.pp.27-30.
- 18 バリのサン・ジェルマン・デ・プレ聖堂のステンドグラスに関しては、以下の論考参照のこと。これらの断片は英国の窓との関わりで問題になる興味深い作例であろう。

- ・ Louis Grodecki, «Stained Glass Windows of St.Germain-des-Près», *The Connoisseur*, CXL, août, 1957, pp.33-37.
問題の窓に関して著者は 'Subject incertain' と記している。 Esp.p.33.
- ・ Dany Sandron, «Saint-Germain des Près, les ambitions de la sculpture de la nef romane», *Bulletin Monumental*, 1996, pp.333-350.